

# 緩和ケア病棟で撮影した写真が遺族に与える影響

佐藤紗加 Sayaka SATOU 米野隆晶 Takaaki YONENO  
中村由美 Yumi NAKAMURA 須藤祐子 Yuko SUDOU

北見赤十字病院 看護部  
Nursing Department, Kitami Red Cross Hospital

要旨：【目的】緩和ケア病棟で撮影した写真が遺族にどのような影響を与えているのかを明らかにする。

【方法】量的記述研究デザイン。A病院緩和ケア病棟で死亡退院された患者遺族145名に入院中の写真撮影の有無、写真を見たときの思い、悲嘆の尺度（BGQスコア）に関するアンケート用紙を郵送した。アンケートは単純集計し、BGQによる複雑性悲嘆の鑑別を行い、「写真を見返す群と見返さない群」、「看護師と遺族で写真を用いたコミュニケーションをした群としていない群」と「故人と遺族で写真を用いたコミュニケーションをした群としていない群」において、BGQに差があるのか $\chi^2$ 乗検定で比較した。

【結果】有効回答の68件（47%）を分析対象とし、入院中に写真を撮った遺族は36名（54%）いた。入院中に写真を見返した時の思いは、【良い思い出となった】など肯定的意見が23件、否定的意見が5件あった。退院後は32名が仏壇など目のつく場所に写真を飾り、月命日や仏壇に手を合わせるときなどに見返していた。写真を見返す8割以上の遺族が「故人が闘病生活を頑張った・楽しかった思い出を振り返られる」について「そう思う」と解答した。BGQスコアを用いた $\chi^2$ 乗検定の結果はいずれも有意差は認められなかった。

【結論】写真は捨てずに見返す遺族が多かった。写真を遺族が見返すこと、また、写真を用いて入院中に家族が看護師や患者とコミュニケーションを図ることは、BGQスコアに影響しなかった。

キーワード：写真、コミュニケーション、グリーフケア

## I. 序 論

オホーツク医療圏内で唯一となるA病院緩和ケア病棟では、2014年12月に病棟が開設され2年間で死亡退院された患者は243名であった。死別を体験した人は悲嘆を経験する。グリーフワークとは死別を経験した人が長い時間をかけて喪失の事実を認め、様々な感情を解放し心理的に適応していく内的過程である。このグリーフワークが正常に行われないと病的悲嘆に移行することがある。複雑性悲嘆や抑うつ状態にあると評価された人は、希死念慮を呈する割合が高い事が明らかになっている（坂口・宮下・森田, 2013, p.205）。このことから病的悲嘆を予防しグリーフワークが自然に進むようサポートが必要

である。

A病院緩和ケア病棟では、遺族ケアプログラムは行われていないが、日々のケアや関わり、エンゼルケアなどを通して意識的に家族に患者の様子を伝えたり家族を労い、グリーフケアにつながるようになっている。その他にも茶話会や誕生日会などのイベントや日常生活の中で記念に残したい場面に、患者の了承を得てその様子を写真撮影し、患者や家族に渡している。「緩和ケア病棟入院中に撮影した患者の写真は医療者と家族との信頼関係の構築と共に癒しにつながっている」（笠原・柴田・下永吉, 2017）ことや、「遺族と死別後に生前の写真で思い出話を語るなど、写真というツールを使用することで、遺族の癒し効果は増大している」（森・遠矢・富貴田他, 2010, p.240）

ことが明らかになっている。これらから、写真を用いたコミュニケーションがグリーフケアに活用できることが示唆されている。しかし、写真を用いたコミュニケーションがグリーフケアにどのような影響を与えているのかについての先行研究はなく、入院中撮影された多くの写真がその後どのように活用され、遺族のグリーフワークにどのような影響を与えているのかは定かではない。

## II. 研究目的

緩和ケア病棟で撮影した写真が遺族にどのような影響を与えているのかを明らかにする。

## III. 研究方法

1. 研究デザイン：量的記述研究デザイン

2. 研究参加施設：A 病院 緩和ケア病棟

3. 研究対象者：平成 28 年 6 月～平成 29 年 7 月までに緩和ケア病棟で死亡退院された患者 169 名の遺族を対象とする。除外基準として①遺族の同定ができない、もしくはいない場合、②A 病棟の入院期間が計 72 時間以内（複数回入院も含む）場合、③遺族が認知症もしくは精神疾患などにより回答が困難と予測される場合、④医療者の総合的判断とする。上記①～④いずれかに該当する 24 名を除外した 145 名を研究対象者とした。

4. データ収集方法

研究対象者へ本研究の主旨と倫理的配慮の文書、アンケート用紙を郵送し、3 週間のうちに回答の投函を依頼した。調査項目は以下の項目および尺度を使用した。

1) 患者背景、2) 遺族背景、3) 緩和ケア病棟で写真撮影した遺族に対して、写真を見返すことでどのような思いを抱くかについて笠原・柴田・下永吉(2017)の先行研究をもとに独自に作成し5件法で質問した。4) 緩和ケア病棟で入院中に写真を撮影しなかった遺族に対して、写真を撮影しなかった事に対する思い、5) 悲嘆の尺度《複雑性悲嘆を簡便に評価出来る Brief Greif Questionnaire (BGQ) を悲嘆の尺度として開発者の許可を経て使用した(伊藤, 中島, 藤沢他, 2012)。全 5 項目を「0～2」の 3 段階評価の合計得点 (0～10 点) によって「1～4 点：複雑性悲嘆の

可能性が低い」「5～7 点：閾値以下だが複雑性悲嘆の可能性はある」「8 点以上：複雑性悲嘆の可能性が高い」とカットオフ値が設けられている》。6) その他（遺族へ病棟での写真撮影について意見や要望があれば自由記載として回答を求めた）。

5. データ分析方法

アンケート結果は単純集計した。次に BGQ による複雑性悲嘆の鑑別を行い、A 病院緩和ケア病棟で撮影した写真を用いて他者（看護師や家族同士など）とコミュニケーションをとった方、もしくは撮影したが他者（看護師や家族同士など）とコミュニケーションをとっていない方で悲嘆の程度に差はあるのかについて、また、写真を撮影した方でも死別後に定期的に写真を見返す人と見返さない人で悲嘆の程度に差があるのかについて比較を行った。いずれの分析も IBM SPSS Statistics ver.20 を用いた。

## IV. 倫理的配慮

本研究は、A 病院の研究倫理委員会の承認を得て実施し、研究協力者へ書面にて調査協力の依頼、本研究の趣旨、倫理的配慮等の説明を行い、アンケートの回答をもって同意を得たものとした。また、遺族の心理的な負担も考慮しアンケートに回答したくない場合は、その旨を選択する項目を作成した。

## V. 結 果

1. 研究対象者の背景

調査票を配布した 145 名の遺族のうち、調査票を返送したのは 74 名 (51%) であった。このうち回答拒否者 6 名を除く 68 名を全て有効回答とした。対象者の患者・遺族背景は表 1、回答拒否理由は表 2 に示す。入院中に緩和ケア病棟で写真を撮る機会があった遺族は 36 名 (54%) であった。

表1 対象者背景

患者背景	N	%	遺族背景	N	%
年齢			年齢		
20~40歳未満	0	0.0%	mean±SD、歳	62.6±11.9	
40~65歳未満	12	18.2%	性別		
65~75歳未満	21	31.8%	男性	22	32%
75~85歳未満	21	31.8%	女性	46	68%
85~90歳未満	8	12.1%	続柄(故人からみて)		
90歳以上	4	6.1%	配偶者	28	41%
性別			患者様の子供	29	43%
男性	34	50.0%	孫・孫	4	6%
女性	34	50.0%	患者様の親	1	1%
入院期間			兄弟姉妹	6	9%
1週間以内	9	13.2%	死別から調査までの期間		
1週間~1ヶ月以内	34	50.0%	6ヶ月未満	13	21%
1ヶ月~2ヶ月以内	18	26.5%	6ヶ月以上9ヶ月未満	10	16%
2ヶ月以上	7	10.3%	9ヶ月以上12ヶ月未満	13	21%
			12ヶ月以上15ヶ月未満	26	42%
			死亡前1週間の面会頻度		
			毎日	55	83%
			4~6日	2	3%
			1~3日	9	14%
			来ていなかった	0	0%
			死亡前1週間の夜間付き添い頻度		
			毎日	12	18%
			4~6日	6	9%
			1~3日	15	22%
			来ていなかった	34	51%
			過去1年間に家族で写真を撮る機会の有無		
			あった	36	54%
			なかった	31	46%
			入院中にレクリエーション等で写真を撮る機会の有無		
			撮った	36	54%
			希望しなかった	1	1%
			撮る機会がなかった	20	30%
			撮っていたかわからない	10	15%

表2 回答拒否理由

・患者様が亡くなった当時のことを思い出すが辛い	3件
・患者様が亡くなった病院や受けられた在宅ケアに対して不満がある	2件
・心の整理がついておらず、そっとしておいてほしいと思う	1件
・患者様の当時のことがわからない	1件
・このアンケートに回答してもこれからの医療の役に立たないと思う	1件
・入院期間や自宅で療養を受けた期間が短くて参考にならないと思う	1件

※複数回答含む

## 2.入院中に写真を見返した遺族の思い

入院中に撮った写真について看護師と話す機会があった遺族は28名(78%)、機会がなかった遺族は5名(14%)、無回答は3名(8%)だった。また、患者も含め遺族同士で話す機会があった遺族は31名(86%)、機会がなかった遺族は4名(11%)、無回答は1名(3%)であった。入院中に写真を見返した時の思いは、表3に示した。

表3 家族が入院中に写真を見返したときの思い

【思い出の写真となった】 9件(28%)	
・入院中の思い出の写真になって良かった。	
・母とツーショット写真を撮っていただけて良かった。	
・病気になる前の写真はなかったので入院中の写真を撮ってもらい、嬉しかった。	
・誕生日にお祝いでいただいたときに写真を撮ってもらい、後にも先にもこれ一枚での思い出の写真となった。	
など	
【写真撮影し、写真をもろう機会があった良かった】 9件(28%)	
・面会に行く写真の説明をしてくれて、スタッフの方々に大切にもらっていると感じた。	
・妹夫婦家族の団圓の様子を無理やり、さりげなく写真を撮りましょかと声をかけてくれた。	
・その後、額に入れた写真と数枚を携き返してくれた心遣いに驚き、その場にいた全員が嬉しかった。	
・親子が笑い中でも笑顔の写真があり、良い時間があったのだと思い嬉しかった。	
・そのような機会を作ってくれたことに感謝している。	
・入院中でも写真を撮ってもらえることがありがたいことだと思う。	
・家族で写真を撮ることがないため、カメラを向けるのはつらい気持ちがあるので撮ってもらって良かった。	
・親からは一緒に写真を撮らうと買い出せなかったで撮ってもらえて感謝している。	
・とき々の時は撮る機会がなかったので、写真撮影は良いことだと思った。 など	
【入院中の様子を知らなかった】 5件(16%)	
・面会者との笑顔も見られて良かった。	
・楽しそうにしていた良かった。	
・家族との面会の時とは違う顔が見れて良かった。	
・家では見えない顔が見られて良かった。	
・面会していないときでも、その時の様子が写真に残っているのありがたい。	
【写真撮影したことに対して】 5件(15%)	
・本人はそれなりに良い表情をしていたが、いきなり写真を撮りましょと言われた感じが、スタッフの声かけは嬉しいと感じた。	
・本人は笑顔ではなかったもので、「どうして写真を撮るのか」「もうすこしで死ぬのか」と思っていたのかと思う。写真を撮ると悲しくなる。	
・「何のために撮るの?」と少し違和感があった。	
・患者さんが見た目元気なうちは良いけれど、ある程度弱ってきてからはあまり撮ってほしくないと思う。	
・病気になる本人からすれば弱々しい姿を写真に撮られるなんてとても嫌な事だと思う。	
・それを見かねて思い出として預けてくれる様に写真を撮られるのは、看護師さん達の話し方次第だと思います。	
・カメラをもっていきなり病室に来るのではなく、前もって確認していただけたら良かったと思います。	
肯定/否定/見ない意見	
肯定/否定/見ない意見	
・顔面麻痺になってから気にしていたようでしたが、看護師さんなら一緒に写真を撮るんだと笑ったことを思い出しました。	
・複雑な心境で良かったのか悪かったのかは今でも正解は出ていない。	
・主人が亡くなる3日前に撮った写真で、その時は撮って頂良かったと思いましたが、今は一人でその時の写真を観ると少し辛いかなと思うときもある。	
・車を停めていたが、元気がなくてその後数日で死亡するとは思えなかった。	

## 3.退院後の写真の管理方法

退院後入院中に撮影した写真の行方として、写真撮影をした36名のうち、32名(89%)が手元にあると答えた。2名(6%)は処分しており、2名とも納棺の際に一緒に入れたと回答された。わからない、無回答が1名(3%)ずつであった。

手元にあると回答した遺族の保管場所として仏壇や仏間、日常生活で視界に入る居間等が多く、その他アルバムや遺品と一緒に保管していた。写真を見返す頻度として「週5日以上」が10名(31%)、「週1~2日」が5名(16%)、「月2~3回」が8名(25%)、「2~3か月に1回」が2名(6%)、「半年に1回」が4名(13%)、「全く見ない」が2名(6%)、無回答が1名(3%)であった。見返すタイミングとしては、月命日や仏壇に手を合わせる時に見返している遺族が多かった。

## 4.退院後に写真を見返した遺族の思い

緩和ケア病棟で撮られた写真を亡くなった後に見返した時の遺族の思い①~⑧と自由記載で得た回答を表4に示した。ネガティブな思い(③、⑤、⑦)を約半数の遺族が抱く一方で、ポジティブな思い(①、②、④、⑥、⑧)も同様に約半数、特に①、②は8割以上の遺族が「思う」と解答している。

表4 退院後に写真を見返したときの遺族の思い

	とても思う そう思う		どちらともい ない		あまり思わ ない 全く思わ ない	
	n	%	n	%	n	%
①故人が闘病生活を頑張ったと思う	30	100	0	0	0	0
②楽しかった思い出を振り返られる	M:12 F:18 22	88	2	8	1	4
③悲しい気持ちになる	M:10 F:12 16	57	M:1 F:1 4	14	M:0 F:1 8	29
④癒される	M:3 F:13 15	57	M:1 F:3 5	19	M:8 F:0 6	23
⑤辛い気持ちになる	M:8 F:7 13	46	M:2 F:3 4	14	M:1 F:5 11	40
⑥あなた自身が頑張ったと思う	M:3 F:10 14	52	M:2 F:2 8	30	M:7 F:4 5	19
⑦痛々しい気持ちになる	M:6 F:8 13	43	M:3 F:5 7	24	M:3 F:2 9	31
⑧元気になる	M:3 F:10 10	40	M:3 F:4 9	36	M:6 F:3 6	24
	M:4 F:6 10		M:6 F:3 9		M:1 F:5 6	

その他

・笑顔の写真で良い思い出  
・病棟入院中のことを思い出す  
・生まれ変わってもまた主人と結婚したい  
・闘病生活を頑張った証となると思い、亡くなった直後はよく見返していた。しかし次第に少し辛かった。1年経た今でも切なくなり、元気な頃の写真を多く見ることが多い。もっと月日が変われば違う気持ちで見られるようになるのではないかと思う。  
・撮ってもらったときは嬉しく感謝していたが、亡くなってからは故人は嬉しかったのか、間もなく訪れる死を察して悲しい気持ちだったのではないかと思える  
・辛い気持ちになるが、主人もこんなに頑張ってくれたのだから、これからは私もがんばらなければね、と仏壇の前で毎日今日も頑張りますから何も心配しないでくださいねと言っている

## 5. 写真を撮影しなかった遺族の思い

緩和ケア病棟に入院中に写真撮影をしなかった・していたか不明の遺族（32名）に対して、写真を撮影しなかった事への思いは、撮らなくても良かったが11名（34%）、撮れるなら撮っておきたかったが7名（22%）、どちらでもよかったが8名（25%）、無回答が6名（19%）であった。回答理由としては、撮らなくても良かった遺族は、「弱った姿を残したくない」という外観の変化に関する回答が多かった。一方、撮っておきたかった遺族の回答としては、「生前の姿を残しておきたかった」という回答であった。

## 6. 悲嘆の尺度（BGQスコア）

対象者のBGQスコアは、無回答7名を除外した61名のうち、低スコアが34名（56%）、中スコアが19名（31%）、高スコアが8名（13%）であった。高スコア8名の死別から調査までの期間は、6か月未満が1名、6か月以上9か月未満が1名、9か月以上12か月未満が2名、12か月以上15か月未満が3名、1名が無回答であった。

BGQスコアを用いて写真を見返す群と見返さない群でBGQに差はあるのか $\chi^2$ 乗検定を行った。写真を見返す群は月命日の頻度以上の「月に2~3回以上」とし、見返さない群はそれ以下の「2~3か月に1回未満」とした。カットオフ値は複雑性悲嘆の可能性が低い群となるカットオフ $<4$ を採用した。また、「入院中に看護師と遺族で写真を用いたコミュニケーションをした群としない群」と「入院中に故人と遺族で写真を用いたコミュニケーションをした

群としない群」において、BGQに差があるのかを同様にカットオフ $<4$ として $\chi^2$ 乗検定を行った。結果は表5に示すとおり有意差はいずれも認められなかった。

表5  $\chi^2$ 乗検定の結果

		BGQ高値	BGQ低値	P
退院後に写真を	見返す(n=23)	11	12	0.233
	見返さない(n=8)	3	5	
看護師と写真を用いた	した(n=26)	14	12	0.57
	していない(n=5)	2	3	
家族同士で写真を用いた	した(n=29)	14	15	0.381
	していない(n=4)	1	3	

※カットオフ $<4$ 

## VI. 考 察

次の2点が明らかになった。1つ目として、入院中に撮った写真を用いて看護師と家族、家族と患者でコミュニケーションをとることは、BGQスコアに影響を与えていなかった。写真を定期的に見返す遺族と見返さない遺族のBGQスコアにも影響を与えていなかった。悲嘆のピークは死別から最初の6ヶ月まででその後は軽減するが人によって大きく異なり、「悲しみの波」「記念日反応」などにより必ずしも直線的に軽減していくものではない（坂口,2010,p.33）とされている。BGQスコアが高かった人のうち、死別から12か月前後の割合が多かった（62%）のは、調査期間が命日付近と重なり、BGQスコアに影響が出た可能性が考えられる。

2つ目として、家族は患者と入院中も良い時間を持ち、思い出を作りたいという希望を持ちながらも、衰えていく患者にカメラを向けることに抵抗感があることがわかった。茶話会やイベント時に写真撮影する機会があることで、家族は患者が衰えていく中での写真撮影を受け入れやすく、闘病中の思い出の写真と捉える家族が多かった。看護師が写真を用いて撮影時の状況などを肯定的に家族に伝えることで、入院中の楽しそうな一場面を家族が知ることができ、スタッフに大切にしてもらっていると感じていることもわかった。また、遺族は退院後に写真を見返した際、悲しい・辛いという気持ちを抱きながらも、故人の闘病生活を労ったり、故人との楽しい思い出を振り返る遺族が8割以上と多かった。自身も頑張ったと思える遺族が約半数いることがわかり、退院後に写真を見返すことはグリーフワークの一助になっている場合もあると考えられる。これらのことから、BGQに有意差はなかったが、看護師が写真を用

いてコミュニケーションを図ることで、入院中の写真に貴重な価値を付与することとなり、多く(89%)の遺族が退院後も写真を破棄していなかったのではないかと考える。しかし、写真撮影をすることに否定的な思いを抱く家族もいるため、写真撮影時は希望の確認とともに説明の仕方に配慮が必要である。また、「患者の『望ましい死』と遺族の悲嘆との関連性が示唆されており、充実した終末期ケアは広義の遺族ケアになりうる」(坂口,2010,p.119)とされている。患者・家族のニーズを満たし医療者と良好な関係性を築くことは、より写真に肯定的な価値を付与するために重要と思われる。そのため、入院中の関わり全てがグリーフケアにつながっていることを意識していくことが大切である。

## Ⅶ. 結 論

- ・緩和ケア病棟で撮影した写真を遺族が見返すことはBGQスコアに影響しなかった。
- ・緩和ケア病棟で撮影した写真を用いて入院中に家族が看護師や患者とコミュニケーションを図ることは、BGQスコアに影響しなかった。
- ・入院中に撮影した写真は捨てずに定期的に見返す遺族が多かった。

## Ⅷ. 研究の限界と今後の展望

本研究は量的研究のため、写真が遺族のグリーフワークにどのように影響していたのかを、時期や悲嘆のプロセスの段階を追って明らかにすることは困難である。今後、看護師は遺族のグリーフケアを意識して入院中から意図的な関わりやコミュニケーションを行うように努める。

## Ⅸ. 謝 辞

本研究に協力していただいたご遺族の方々を始め、西本医師、安藤師長、指導していただいた皆様に心より感謝申し上げます。

## Ⅹ. 文 献

- 1) 伊藤正哉、中島聡美、藤澤大介他(2012).

Brief Measure for Screening Complicated Grief: Reliability and Discriminant Validity.

<http://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0031209>

- 2) 笠原綾夏・柴田雅男・下永吉麻里(2017). 緩和ケア病棟入院中に撮影した患者の写真が遺族にもたらす効果. 日本がん看護学会誌(0914-6423), 31巻 Suppl, 224.
- 3) 坂口幸弘(2010). 悲嘆学入門—死別の悲しみを学ぶ. 33. 119. 昭和堂
- 4) 坂口幸弘・宮下光令・森田達也・恒藤暁・志真泰夫(2013). ホスピス・緩和ケア病棟で近親者を亡くした遺族の複雑性悲嘆、抑うつ、希死念慮. PalliativeCareResearch2013, 8(2), 203-210.
- 5) 森恵(2009). 在宅ケアにおける“フォトセラピー”の実践—“フォトケアTM”のすすめ. コミュニティケア, 2009.5, 65-69.
- 6) 森恵・遠矢純一郎・豊貴田景子・福元ゆかり・前村志保子(2010). 写真で行うグリーフケア. ホスピスケアと在宅ケア, 18(2), 240.